

紹介

Jean Charles PAYEN , Littérature française,
1. Le Moyen Age, Paris (Arthaud), 1984.

原野昇

本書は同じアルト一社から出ている同名のフランス文学史全16巻を、このたびポケット版(全9巻)に編集しなおしたものの第1巻である。旧版では **Le Moyen Age I, Des origines à 1300, par J. C. PAYEN, 1970** と **Le Moyen Age II, 1300–1480, par Daniel POIRION, 1971** の2冊に分かれていたものを、1冊にまとめPAYEN氏が1人で執筆を担当したものである。ただしこの度は終りを1430年頃までとし、以降は第2巻で扱われている。 **2. De Villon à Ronsard, de la fin du XV^e siècle au dernier tiers du XVI^e siècle, par Enea BALMAS & Yves GIRAUD.**

旧版の2冊が1冊にまとめられたと書いたが、単に2冊分の分量が約半分になっただけではなく、内容的にもかなり一新され、ほとんど新たな書物と考えてよかろう。それは旧版では2人の異なる著者によって分担執筆されていたのを、新版では1人が通して執筆したという理由からだけではなく、著者自身かなり意識的に従来の「文学史」のイメージを打ち破ろうと努め、新しい中世文学史を提供しようとしたからである。「文学史」と言えば固有名詞、すなわち作者名や作品名が年代順に並べられているという一つの定まった型があるが、本書の著者はそれらを必要最低限にとどめ、それよりもむしろ大きな時代区分(ここでは中世)全体を一まとまりとし、その時代の全体的特徴を把握することにより多くの力を注いでいる。例えば通史的視点からの第I～IV章は合わせて80ページ足らずであるのに対し、ジャンルの問題を扱った第V章にはこの章だけで80ページ以上が充てられている。それは著者がこの問題が中世文学のなかで重要な問題だと考えているからである。その代り巻末に作家や作品の解説と参考文献を紹介した作家作品辞典と年表が付けられている。全体392ペー

ジ中、本文が240ページで、作家作品辞典が106ページ、年表が23ページあり、文学史としてのバランスがとれている。この形式は旧版も同じで「辞典」と年表は補充訂正を加えて新版でも踏襲されたが、旧版にあった選文集は新版のポケット版では写真ページとともにやむなく割愛された。選文集はポケット版でも色々出版されているので、そちらに譲るといことなのであろう。

第1章「フランス固有文学の発生」ではラテン語に対する俗語としてのフランス語で書かれた文学（広い意味での）の発生、作品と聴衆（読者）、作品の口頭および書記による伝播を概説し、第2章「中世世界または探究された西洋」では、中世人の目にうつる世界像、異教徒観を地理的あるいは想像上のそれをも含めて紹介している。第3章「聖史から俗史へ」では「歴史」というものの中世における変貌を文学作品をとおして解説している。第4章「祭と狂気：民間伝承と社会の疎外者」では祭、阿呆、さかさまの世界からの文学、および異端者やらい病患者など疎外階層への言及もある。そして第5章が著者が最も力を入れた「中世の文学ジャンル」である。ここでは、聖者伝、武勲詩、聖書の翻訳、抒情詩、教化・教導文学、歴史、物語、短詩、『狐物語』、フェブリオー、篤信物語、演劇、説教劇、古典翻訳の各ジャンルについてその発生、発展、変貌、衰退、他ジャンルからのまたは他のジャンルへの影響などを年代順に作品名を挙げながら解説している。上記のジャンル分類には著者独特のものも含まれている。例えば聖者伝と篤信物語とを区別したのは、後者はフェブリオーに近く、聖人の生涯は入っていないからであるとし、また教化・教導文学と説教劇を区別したのは、前者は個人の宗教的信仰の深化をめざしていないからであるとしている。著者のこの立場は首肯できるものである。第6章「中世的エクリチュール：進化と不変」では、口承文学における記憶を容易にすべき詩法、および読まれる（音読）文学としての物語の誕生をとおして、書くことの問題に焦点をあてている。第7章「文学〈トポス〉と精神性：不変性と相互干渉性」では、これこれのトポスがいつ、どこで用いられるようになったかと言った種類の問題ではなく、あるトポスの頻出とあるジャンルの成功とを、その観賞者（聴衆または読者）の精神性との関連においてみようとするものである。ここで著者は、本来はあるジャンルに固有のトポスを他のジャンルに応用することを交錯 *interférence* と呼び、トポスのレベルからジャンルの問題を、再び見なおしてみようとするものである。

中世文学史を扱うときには、文学のみでなく、中世人の世界観、宇宙観の問題、文化の一大担い手としての教会および聖職者層の役割、支配階級としての騎士階層と農民をはじめとする一般民衆の文化享受の仕方の相異、といった思想史、社会史をも含めて考察せざるをえないが、上にみた本書の構成、各章のタイトルおよびその簡単な解説からも理解されるように、本書は特にそのような、文学を取り巻く環境や文学の社会学的問題に重点がおかれているように思える。これはとりもなおさず、そのような立場からの論考の多い著者のパイヤン氏の日頃の興味と関心の反映に他ならないであろう。

体裁は簡便なポケット版になったが、内容的にはかなり高度な点もある。ただ本文 240 ページと、その二分の一以上の 150 ページにもおよぶ辞書および年表部分との有機的利用が必ずしも容易とは言えないのが惜まれる。

(付記)

この原稿が印刷にまわった後、校正の段階で著者パイヤン氏の訃報が伝わってきた。60才は越えておられると思うが、まだまだこれからの御活躍が期待されていただけに残念きわまりない。心から哀悼の意を表したい。 (1984.10.12)